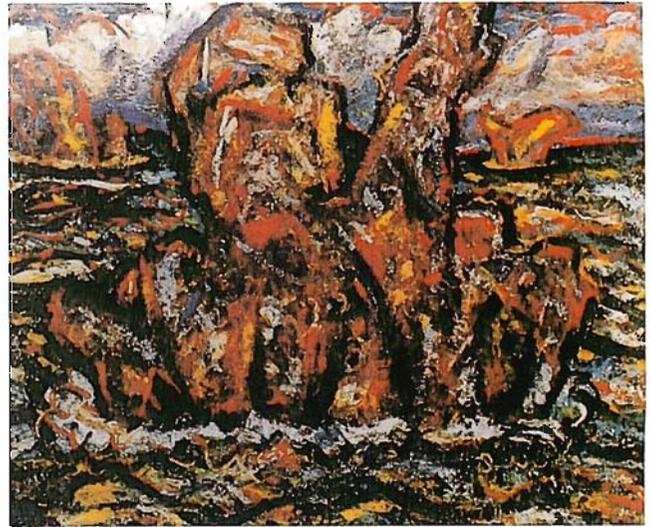


## 八雲の三男 小泉 清のこと

金 原 理

五高で教鞭を執ったこともある小泉八雲—八雲は1891年(明治24)11月から3年間、五高で、英語とラテン語を教えた—は我々日本人にとって馴染み深い作家だが、彼の三男小泉 清が優れた画家であったことは意外に知られていない。彼は1962年(昭和37年)2月21日、62歳でみずから命を絶ったが、その死を悼んで「芸術新潮」(1962年4月)、「三彩」(1973年2月)など、一流の美術誌に追悼の文章が寄せられたり特集号が組まれたりしているし、またこの同じ年に刊行された『小泉清画集』(1973年2月、救龍堂)には、里見勝蔵らの画家以外に、武者小路実篤、石川淳など、その当時の著名な作家が彼を回想する文章を載せている。この一事をもってしても、彼が一時期を画した画家であったことを窺うことができるだろう。清は1919年(大正8)に東京美術学校(現在の東京芸術大学)に入学、同期生に岡鹿之助、1年上級に佐伯祐三、5年上に里見勝蔵がいた。彼はこの里見に兄事し、絵の手解きを受けている。里見は数少ないヴラマンク(1876~1958)—熊本県立美術館にはヴラマンクのすぐれた風景画が所蔵されている—の弟子で、彼には師匠直流のフオ-ヴィスム(野獣派)的な原色を荒々しく駆使した奔放な作品が多い。清は病を得て1921年(大正10年)に美術学校を退学しているが、そうしたこともあって画家としてのデビューは遅く、読売新聞社主催の第1回「新興日本美術展」が1946年(昭和21)に開かれたが、これに里見に勧められて作品を出品したのが最初であった。出品作品は「向日葵」他3点であったが、読売賞を受賞、デビューを飾った。その実力を梅原龍三郎に認められて、1954年(昭和29年)に国画創作協会の会員に推挙されている。その一年前には第2回「日本国際美術展」(毎日新聞主催)に出品しており、その後は大阪や東京で個展を開いて、精力的に活動を続けた。彼が里見勝蔵に師事したことは前に述べた。初期の作品には師匠譲りの原色を自在に操った奔放な絵も見られるが、じきに清独自のスタイルを獲得するに至る。それは厚塗りによって画面



小泉 清 「岩と海」(恒文社刊行『小泉清画集』より)

に重厚感を与え、裸婦の肌もまるで岩肌のようなマチエール(質感)に仕上げていることである。そして物と物との境目を大切に、作品によってはその境界線をあざやかなヴァーミリオン(朱)で縁取りを施しているが、それが極めて効果的で絵の魅力を引き立たせている。対象は自由にデフォルメされ、一見荒々しいタッチで画面に筆を叩き付けるように表現されているが、静謐な美しさが伝わってくる。清には八雲の血が流れているが絵は非ヨーロッパ的で、むしろ日本の土の香りが強く感じられる、そんな作風なのである。彼の画家としてのデビューは46歳で決して早くはないし、また働き盛りの62歳で自ら命を絶っているが寡作ではない。1989年(平成元年)に恒文社から刊行された『小泉清画集』には237点が収集されている。清の画集はこの18年に凝縮されたのだった。

<付記>年譜の部分に関しては、『小泉清画集』(恒文社 1989年刊)を参考にした。

(きんばら ただし 文学部教授)